

ニホンザルの非交尾期におけるオトナのオス
とオトナのメスの親和的関係の分析

高畑由起夫(京大・理)

前年度の調査に引き続き、嵐山B群を対象に非交尾期におけるオス・メスの関係を、個体の空間配置や社会行動により分析した。

1976~77年にかけて、空間的近接やグルーミングが通時的に認められ、特異的な社会関係にあると推定された54例のオス・メスのペア、および1977~78年の交尾期に新たに形成されたと推定される14例のペア、計68例のオス・メスのペアは、1978年の非交尾期において、以下のタイプが認められた。

- (1) 休息場面、採餌場面ともオス・メス間に近接が認められ、グルーミングも見られる……31例(46%)。
- (2) 休息場面、採餌場面ともに近接が認められるが、グルーミングは見られない……6例(9%)。
- (3) 休息場面のみ近接が認められ、グルーミングが見られる……4例(6%)。
- (4) 休息場面のみ近接が認められ、グルーミングは見られない……3例(4%)。
- (5) 採餌場面に著しい近接が認められるが、グルーミングも見られる……9例(13%)。
- (6) 採餌場面のみ著しく近接する……4例(6%)。
- (7) ごく弱い近接が、かなり長期にわたり続いている例……5例(7%)。
- (8) 明らかに、以前にはあった特異的な社会関係が解消した例……6例(9%)。

8のタイプを除いた62例について、45例(73%)にグルーミングが、44例(71%)に休息場面(“近接の効果”〔北村, 1977〕が実質性をもたない)での近接が認められた。また、グルーミングの開始の際のビヘイビア・パターン、あるいはアプローチ・フォローイングなどの社会行動が発現する時のオス、メスの態度は、血縁関係にあるメス・メス間に見られるそれによく似ている。このように、通時的に近接あるいはグルーミングが認められるオス・メス間には、血縁関係にあるメス間に認められるような、ある種の“親和性”が存在していると思われる。

箱根におけるニホンザルの社会生態学的研究

福田 史男(マカク研)

田中 進(マカク研)

i) 各群の性・年齢構成とその年変動を明らかにし、地域個体群レベルの個体数変動をとらえる。また、個体の離脱・加入の面から群間関係を分析する。

ii) T群のサブグループの構成を記録し、サブグループ・ピッキング機構の社会生態学的要因を解析し、従来のニホンザルの群れ概念について考察する。本研究は上記の目的に従って、'73年から'77年までの資料整理を進めた。ここでは、資料整理が完成したものについて簡単に報告する。

一般的に、ニホンザルの群れとは両性の各年齢層の個体を含む集まりを意味する。箱根T群の場合は、その集まりの大きさと構成に季節変動がみられることがわかっている。それは1頭から始まるさまざまなサイズのグループが存在する。'75年の資料では、ヒトリザル; 184(メス19頭含む)、オスグループ; 111; メスグループ; 6, 小グループ(≤ 30 頭); 157, 群れ(≥ 31 頭); 168の計628グループであった。これらの各グループの餌場への滞在時間をみると、ヒトリザルは10分以内が全体の半数近くを占め、オスグループは1時間以内のグループが多く、メスグループは全てが2時間以内であった。また、小グループは、30分以上2時間以内が約 $\frac{1}{2}$, 群れは半数以上が5時間以上の滞在時間を持ち、両性を含むグループでは、サイズが大きいグループほど長い滞在時間を持った。また、メスグループは新しい知見であるが、1例を除いた全ては、交尾期に集中した。また6例共、オトナメスにより形成されていた。また、オスグループに関係した個体のデンドログラムを作制してみたところ、メスとは関係をもつが、他のオスとは全く関係をもたないクラスターを持つグループがいた。